

インタビュー

VOL.6

ブレヴォ田辺智子先生

《プロフィール》

医療法人知音会 御池クリニック レディースドック長
米国内科専門医
京都府立医科大学医学教育研究センター 特任講師



Q1 まず、学生時代はどのように過ごされたか。例えば思い出に強く残っていると、クラブに入っていたとか、そういう学生時代にされてきたことをお聞かせいただきたいのですが

学生時代は特に目的を持って志高く勉強したわけではないのですが、ゴルフ部に入っていました。ただクラブ活動もそんなに熱心にやっていたわけではなくて、学生時代一番よく印象に残っているのは、今はもうお亡くなりになっている第一病理学教室の芦原先生の教室に出入りして、病理教室の先生方にすごくかわいがっていただきました。その中で先生方からいろいろ留学の話とか聞くうちに私も行ってみようかなと思って・・・

それと同時期にある日学生課においてあった週刊医学界新聞を手に入れました。それに、野口医学研究所のシンポジウムが掲載されていて、親にちょっと新幹線代を出してもらって東京へ行きました。そこで、こんなに志高く勉強している学生さんがいるのかとびっくりしました。そこからECFMGと国家試験のことも勉強し始めたんです。

また、学生時代の5回生の時に、病理の先生に紹介されてハーバード系列のマサチューセッツ総合病院(MGH)の整形外科に一月、その後フィラデルフィアのトマスジェファソン医科大学病院の病理学教室でまた一月お世話になりました。

学生時代には、その病理ですごした時期と、その後の海外留学の二つがとくに心によく残っています。ただ、決して成績優秀な生徒ではなかったです。

Q2 ありがとうございます。で、今のお話を聞きますと、同じことになるかも分からないのですが、将来展望というのはどのようにお持ちだったのですか。

将来展望というのは・・・とにかく父親が医者で内科で開業していましたが、父の働きぶりを見てこ

んな大変な生活は嫌だと。母の思いとしては、女性で医者になって一階で開業しながら上で子育てしてほしいと勝手に思っていたみたいなんですけど、私はそんな公私混同するような生活は一切まっぴらごめんだと思っていました。病理医になろうか、いろいろ考えていたのですけれども、自分の性格を見た時に顕微鏡をずっとみてるっていうのが、性にあってないのではないかなっていうのを学生時代に思いました。内科だと潰しがきくんじゃないかな、というので漠然と5回生くらいから内科医を目指しました。特にその時には海外に行こうという感じではなかったです。

Q3 では、どんな経緯で海外に行くことになったのでしょうか。

東京にいろんな機会があって出入りする中で、東京で出会った医学生たちから影響を受けて、やっぱりまあ勉強した方がいいんじゃないかとは思って、ぼちぼちアメリカの国家試験の勉強を始めました。その時にお付き合いしている人がいて、その方がアメリカでまず、内科のレジデンシーのために留学されることが決まっていたので、一緒にいこうということで、私もちょうどその時、ここの研修医だったので、必死でアメリカの国家試験に受かるように勉強して、ついて行く覚悟で行きました。

Q4 アメリカで実際、医師免許に相当するライセンスを使って働いておられたときいているのですが、米国で働き方が違うというのはよく聞くのですが、実際どうでしょうか。医師として、お父様が大変遅くまで仕事をされていたというのを伺っていたのですが、どうだったんでしょう。

そうですね、一応私はレジデント、それからフェロー、そして日本の教員にあたるファカルティっていうのを三段階経験したのですが、まずレジデントで思ったのは日本の研修医と違って、オンとオフの区別がものすごくはっきりしていました。レジデント1年目にくたくたに働いていて疲れていても、それでもやっぱりごはんを食べにいったりとか、スキッと休める時間があったりして。特にポケベルを持たないでいいっていう日が週に一日でもあるっていうのが、ものすごく精神的に随分楽だなぁっていうふうに思いました。

あとは日本と違って、アメリカの方はレジデントとして働く際に一年目→二年目→三年目で習得すべき学習目標みたいなのがものすごくはっきり設定されていました。それに向かって努力すればよかったので、ある程度クリアカットに目標があったのが働きやすかったのです。

日本ではなかなかどういうふうに評価されているか分からないし、自分がどこまで上達されているのか目に見えない部分があったのですが、360度評価でいろんな人から評価を受けることによって、自分がレジデントとしてのレベルをどれくらい評価されているというのが分かりました。逆に厳しいところもあったのですがよかったです。

その後フェローを2年間したのですが、その時に医学教育学を専攻しました。2年間、ある程度お給料をもらいながら半研究者、半臨床家としてゆっくり考えて自分が何をしたいのかっていうのを見極

める時期があったのも非常によかったと思います。

特に毎日どこにも行かなくても何も言われなような生活だったんですが、その時に自分がやっぱり好きなことは医学教育で、人と関わっていくのが楽しいということが分かりました。

ただその後、大学教員つまりファカルティとしてサンディエゴへ移った時には、やっぱり大学教員というのは大変でした。臨床家としてのノルマも果たしながら、大学の教員として残っていくために、ある程度、学会発表とかをしていかないといけないので大変でした。それでも日本と比べると、やっぱり勤務時間なんかは短かったですし、子育てをする時間も一応確保はできていたと思います。

Q5 米国に全部で何年いらしたんですか。

12年弱です。

Q6 一番印象に残ったイベントとかそういうのはありますか。

イベントというよりは、一番印象に残っているのは、出会った素晴らしい人々です。皆さんそれぞれに人間として素晴らしい人で、可愛がってくださいました。レジデンス時代に知り合った恩師二人とは未だにずっと交流を続けています。向こうの家族の中に入れてもらって家に呼んでもらったり、本当によくしていただきました。フェローシップの間の二年間もそういう方がいらっやって、サンディエゴに移ってファカルティになってからも同僚として皆さん素晴らしい人たちに会えました。企業でも一番の宝物は人材といいますが、そういうふうな素晴らしい人に会えたというのが一番だと思います。

逆に、そういうふう可愛がってもらったから、自分もそういうふうになれるようにしたいな、というので医学教育に興味を持ったのかもしれないので。

Q7 今のお仕事の内容について、スケジュールなんかをお聞きしたいのですが。

まだ息子が保育園に行っていますので、朝の基本的には5時に起床して7時には家を出て、朝一番、保育園が空いた途端の7時半に息子をおろして8時前にはオフィスに入ります。

大体は5時きっかりには終わらせていただいて5時半には息子をお迎えして6時過ぎくらいに夕ご飯という形で一日送っています。アメリカと違って夕食後に仕事をするということができないので、出来る限り早く入って仕事を終わらせるように。

今の仕事内容は内科の健診でするので結果表作成とか診察とかで、以前に比べるとずっと仕事の濃度というのは薄いかなあとと思います。

Q8 家で今、夜、仕事できないっておっしゃっていたんですけども、それはアメリカでは家で仕事をできたということなんですね。

はい。アメリカの方では、たいがいこの電子カルテシステムも自宅にインターネットのアクセスさえあれば、病院の中の電子カルテの全く同じ環境に入れるようになっています。どうしても息子のお迎えに行くまでにカルテ書きが終わっていなかったり、サマリーが書き終わってないと、家で仕事をせざるを得ないときがほぼ毎日くらいあったんです。

病院の中に長くいる男性医師と違って、女性医師で子どもをもっている人は、時間的な制限があります。でも、意欲があつてノルマさえこなせば、同じ量だけ業績を認められて、男性医師と同じように昇進できるというシステムが非常に魅力的でした。このシステムはぜひ日本にも取り入れるべきだと思います。

Q9 ありがとうございます。

あとはですね、さっきおっしゃっていたように自分にとってこれまでどのような人の影響を受けたとおっしゃられるのかというのを伺いますと、アメリカにおられた時に複数の人にいろいろとお世話になったり可愛がられたということですね。

それは、日本ではまだ学生だったというのも一つの理由ではないかなと思います。それに、研修医の時は同級生とかオーベンの先生以外には、他に縦、横のつながりというのはあまりありません。ただ帰国して、こんな風に男女参画推進委員会に入らせていただいて、私と比較的年が近い先生から、矢部先生も含めて今大学にいらっしゃらない先生方まで交流する機会ができるというのは、すばらしいことだと思います。

Q10 そうするとやはり帰国されてから交流があったということですね。

そうですね。日本ではなかなか社会人としての経験を積まないままに向こうに行ってしまったので。

Q11 あとは、学生時代、クラブなど、何か学生時代過ごした経験が役に立っていると思いますか？

実は私の同級生で、はるかに私より勉強できた女性がいましたが、なぜかよく馬が合ってしょっちゅうつるんでいたんです。基礎配属も彼女と一緒に第一病棟に入りました。

その関係で実は国内留学というか、学生時代に二人で国立がんセンターとか虎ノ門病院とか、い

ろんなところにのこのこ邪魔した記憶があります。彼女と一緒にゲーテ・インスティテュートという所にドイツ語も勉強しにいったりとか、いろんなことを二人で一緒にして、他の病院にも見に行っ、外に出た行ったっていうのはすごく良かったと思います。

Q12 なかなかいい話ですね。まあ語学では今インスティテュートとおっしゃいましたが、語学はもともと強いというか、またそれは英語については、もともとどこかスクールに通っておられたとか、どういう風な状況でしょう。普通の語学力でアメリカで臨床ができるのかどうかということが知りたいのですが。

私は中学入学直前くらいから、ベルリッツという語学スクールでプライベートレッスンを週二回、それを中学1年生から高校二年生位まで続けたので、大学入るころにはアメリカに行って日常生活に困らないような英語力はついていました。

そこから日本で研修医を一年くらいしてからアメリカに行きました。かなり自分の英語力には自信をもっていたのですが、やっぱり毎日のニュース、特にニューヨークのローカルニュースなどが、英語が早くて分からなかったんです。半分以下、いえ30%くらいしかその時分からなかったと思うんです。

で、これは悔しいと思って何をしたかというと、アメリカの映画には耳が聞こえない方のために英語で字幕が出るようになっているので、とにかく字幕で何をいってるか、耳と字幕を合わせて、こういうふうな形で発音されるのか、ということを徹底的に覚えました。あとは、自分が気に入ったDVDを4ドルとか5ドルでアメリカは買えますので、それを徹底的に何回も見て、もう暗記できるくらいに見ると、どういう時にこういう表現が使われて、こういう時にはこういったらいいんだというのがあやふやじゃなくはっきりと分かるようになりました。それによって英語力は、アメリカに行ってから一年間でかなり飛躍的にアップしたと思います。

なるほど。それは非常にいい、有益なお話ですね。ありがとうございます。

Q13 最後に、本学の女子医学生にアドバイスをお願いします。

京都府立医大は最近やっぱりマッチングですごく人気が高くて、学内に残る人がすごく多いと聞いております。それはいいことですが、他学の方でジツツの病院をそんなにもってない大学出身の方というのは、学生時代にいろんな病院を見て回ったりとか、真剣に研修先を選んでどの病院にしようかっていうのを決めていきます。出来る限り他の病院とか他の勤務形態、就労形態があることを見極めてください。自分に合ったところを一旦見つけたら、卒業して数年間は石にかじりついてでもがむしゃらにやって力を伸ばしてください。最初にゆるやかカーブを描いてしまうと、そこから飛躍的な向上がなか

なか難しいと思います。とにかく医者になって最初の、すくなくとも 5 年間は自分磨きのために死ぬほど働いた方が自分にとっても自信がある医者になれると思います。

ありがとうございました。非常にいいアドバイスをいただいたと思います。